

退任記念の最終講義を拝聴して

経営学部 岡崎守男

竹浪教授の退任記念の最終講義を1月14日に聴かせていただいた。講義に出席することで、大学を去って行かれようとしている一人のすぐれた経済学者に対する礼をはたさなければならないという気持ちはたしかにあった。しかし、それにもまして「社会主義経済研究の回顧と教訓」というその講義のテーマは、それを伝える案内を控え室のメールボックスに見たときから人の気持ちをその聴講へと導く十分に魅力的なものであった。

私自身はその分野の研究者でないから、先生の労作を系統的に勉強したことではない。しかし、たまたま読んだ論文や著作によって、また、ちょっとした先生との雑談をとおして、とかくドグマが先行しやすいその研究分野にありながらも、先生が一貫して現実の動きの分析を通して理論を構築するという姿勢を保持され、また同時に、問題をたえず全体的な視点からとらえられようとしていることを私なりに知っていたし、そのことには内心敬意を表していた。

先生の最終講義は、社会主義経済を規定するとされてきた4つの特徴に即して、主としてかつてのソ連を対象にしながらこれまでの社会主義がいかに社会主義でなかったかを検証されようとしたものであり、また、検証の対象は社会主義のよって立つマルクスの理論にまで向けられなければならない、とするものであった。限られた時間のなかで行うにはあまりにも壮大なテーマであり、よくそのような場合の講師が自分の話にあとで不満を感じるように、あるいは先生も論証の十分でなかったところや言い残したことを意識しておられるかもしれない。しかし、私には先生の講義は十分に満足なもので

あった。三木清流にいえば、いまは「問題を提起する」ことがなお重要な
だから。

当然のことではあろうが、先生はまた現代の資本主義経済が逢着している
若干の問題についても論究された。これまではとかく資本主義と社会主義が
原理の異なる二つのシステムとして理解されてきた。しかしながら、システ
ムとしての社会主義が崩壊したまさにそのときに、そのようなとらえ方が意
味をなさないことが問われているのではないのだろうか。私は、このような
問題についての示唆にとむ論究を拝聴しながら、先生もまた、現代の世界経
済をトータルなシステムとしてどうとらえたらよいのか模索しておられるの
かな、と思ったりもした。

「すべてのものには終わりがある」というチェホフの言葉で先生はご自分
の最終講義を締めくくられた。それは私たちよりちょっと上の世代の人たち
に共通する謙譲であると、とっておきたい。定年を前にして退任されること
については残念ながらそのご事情を受けとめなければならない。しかし、い
まなお知的考究心の人一倍おう盛な先生が退任を機に「思考」と「対話」を
停止することなどできるはずもないのだから、こんどはより自由な立場から
私たちの研究活動に刺激を与え、そのリーダーシップをとっていただくよう
あらためてお願いしたいと思う。